

人の戦いを砕く神の「怒り」と貧しい人の救済

まず、詩編 76 編を祈りつつ読んでみよう。この詩で印象的なことは、「神の怒り」であるが、それについては以下で少し熟考してみよう。イスラエルは元々文化の異なる北イスラエルと南ユダからなる連合国であったが、詩は「神はユダに御自らを示され/イスラエルに御名の大きいなることを示される。神の幕屋はサレムにあり/神の宮はシオンにある。」(2-3 節) の神の自己顕現定式で始まり、その内実の一つが、神が人間の戦争を絶つというメッセージである。「そこにおいて、神は弓と火の矢を砕き/盾と剣を、そして戦いを砕かれる。」(4 節) 預言者的響きがこだまする。

1. 神殿礼拝における神の自己顕現 (啓示) 2~3 節

詩の最初の言葉は「知られる」ヘブライ語直訳は、「知らせる、ユダに神は、イスラエルに偉大な名を」あるいは「神はユダに知られる神であり、そのみ名はイスラエルにおいて偉大である。」ここでも人間ではなく主語は「神」である。神が歴史・世界において行動を起こされる。ここにイスラエルの信仰の原点がある。ここでは「サレム」(平和)と「シオン」が登場する。「サレム」は「エルサレム」(神は平和である)で良く知られるが、サレムにおける「幕屋」(sukkōw)に、そして神殿が立地する「シオン」の丘が登場する。神殿礼拝における神の臨在が歌われる。そこに神は「おられる」、シオンにおける彼の「居場所」におられる。

2. 戦争の休止あるいは廃棄 4 節

「そこにおいて」が強調されているので、エルサレムに攻め上ってきた敵の軍勢を神が打ち砕いたことが回顧され、現在化され、終末論的希望をもって歌われている。「その弓の矢と盾を砕き、剣と戦闘を砕いた。背後には、エルサレムを包囲したアッシリア軍が一夜で壊滅した奇蹟的出来事があることは確かであるが、その出来事に捉われず、神話化、一般化しているのだろう。現在のウクライナ、ミャンマーそして少し前の香港、そして、琉球弧の軍事基地化と石垣島奪還作戦の訓練のことを考えると「神がその弓の矢と盾を砕き、剣と戦闘を砕いた」というヴィジョンを持つこと、あくまでも平和外交こそ肝要であろう。それが 77 年目の広島、長崎の被爆体験を思い起こす 2022 年 8 月 10 日の祈りであろう。

3. 神は審きのために立たれる

信仰者は自ら闘うのではなく、神ご自身が闘われる。信仰者は代理人として戦争をするのではなく、「静まること」を選択する。「静まって、わたしこそ神であることを知れ」(口語訳詩篇 46:10) 神ご自身が「立ち上がり」(5 節、10 節) 審判を執行される。その時、この世で「勇敢な者」「戦士」「戦車」「馬」も力を発揮できず、眠りこけてしまう。ヤコブの神が叱咤される。人は神の前では「立ちえない」(8 節)

4. 神の「怒り」「憤怒」と人間の怒り

詩編 76:8、11 では神と人の怒りに同じ言葉が用いられる。通常「喜怒哀楽」の中でも「怒り」は抑制

されるべきであると教えられる。しかし、聖なる「怒り」というものがある。ローマ1:18によれば「不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現わされます」。2:5, 8:5など参照。「怒り」とは不義に対する応答であり、義を防御するものである。ギリシヤ文化の中にも聖なる「怒り」が登場する。スタインベックの大恐慌下の労使対決と労働者内部の分裂を描いた『怒りの葡萄』は黙示録14:10に由来する。

また、人間の「怒り」を信仰の名で抑圧してはならない。（「怒りの取り扱いの重要性：キューブラー・ロスは、人間は五段階（stage）のプロセスを通して徐々に死んでいくものであることを明らかに、第一段階は、否認（denial）、第二段階は、怒り（anger）、第三段階は、取り引き（bargaining）、第四段階は、抑鬱（depression）、第五段階は、受容（acceptance）であると言う。「怒り」は他者、そして自分自身を傷つけるが、これをコントロールすることは難しい。怒ることを、聖なる神、愛と慈しみの神に委ねることが得策である。エフェソ4:31は「無慈悲、憤り（wrath）、怒り（anger）、わめき、そしりなどすべてを、一切の悪意と一緒に捨てなさい。」と言っている。神を畏れることこそ人の正しい応答であろう。

5. 神の審判と地の貧しい者の救い

10節の「神は裁きを行うために立ち上がり、地の貧しい人をすべて救われる。」は慰めに満ちた言葉である。審判は一方では、悪に対する義の応答であり、他方、信じる者への救いなのである。この両面を見ることが重要であろう。

6. 神礼拝への招き

怒りをもって義を貫き、貧しい者の救いのために闘われる神に対して、感謝の応答礼拝が相応しい。「あなたたちの神、主に誓いを立て、それを果たせ。取り囲むすべての民は/恐るべき方に貢ぎ物をもたらすがよい。地の王たちの畏れる方は/支配者の霊をも断たれるであろう。」人間の戦争を打ち砕く神に対しては、静まる（鎮まる）こと、畏れること（8, 9, 12, 13節）が相応しい。「支配者の霊」という表現も興味深い。兵士たちの弓矢、盾などだけではなく、支配者たちの闘う精神、闘う気風そのものをも神は切り倒すであろうというのである。実はこのことが起こらない限りは地上から戦争は絶えないのだろう。